

# 激闘！バトルドッチ ガール

茜 空

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

バトルドッチボール。

それは最近よくある美女や美少女達ばかり登場するソーシャルゲーム。

細かいルールの違いは色々あるものの、基本はただのドッチボールと変わらない。

しかしこのゲーム、普通のドッチボールと決定的に違う点が二つある。

必殺技の存在と、着衣ブレイクだ。

この世界ではドッチボールが大人気であり、ドッチに強い者は憧れの存在だ。そして美女や美少女達が、しのぎを削り、己のプライドをかけて闘うのである。

そんな世界に一人の男……いや、女の子が転生を果たす。

女の子は気づいていない。ここがゲームの世界だと。

女の子は気づいていない。自分がぶっ壊れ性能を持ったチートキャラだと。

# 目次

↳ プロローグ↳ なんぞ、これ？

1

↳ プロローグ↳ 友親、気付く |

10

くプロローグく なんぞ、これ？

「……なんぞ、これ？」

そんな言葉が思わず溢れる。

今、俺の目の前で行われているのはドッチボール。……ドッチボール、のはずだ。

「くらえっ！ 烈火球！」

「きゃあああ！」

「白井選手、アウト！」

相手の選手（美少女）が結構恥ずかしい必殺技名を叫びながらボールを投げる。しかしこれが実際男も真っつ青な豪速球で、しかも言葉通り炎を纏いながら僕の近くにいた美少女を吹っ飛ばす。

吹っ飛ばされた少女は、最近の大人の男性向けのゲームのサービスシーンの如く、服をボロボロにしながら吹っ飛んでいった。

「……なんぞ、これ？」

僕は再び同じことを呟く。

コロコロ……

目の前にこぼれ球が転がってきたので、それを拾いあげる。

「みんな気をつけろ！決勝で出てくるってことは相手の秘密兵器の可能性が高い！」

えあ!? 僕!? 僕そんな大それたもんじゃないんだけど!?

「すまん指宿いぶすき」

「後は頼む！」

「やつちやえ友親ともちかあー！」

え? 僕が投げるの? マジで? 素人の僕が? 無理無理(諦めモード)。よし、外野にパスしよつと。

……あの、そのめっちゃ期待した視線やめてもらえます? すぐくパスしにくいです。ええい、観客も煽るんじゃない! ますますパスしにくくなるだろうが! ってそうですよね。そんな雰囲気でもパス警戒しますよねえ? ライン側に一人配置しますよねえ。

クソが! パスって選択肢完全に潰されてるじゃねーか!

「もう、どうなつても責任持ちませんからね?」

僕は半ばヤケクソになって助走を始める。

「ふっ!!」

そしてありつたけの力とストレス(笑)を込めて全力投球。するとボールがまるで僕の思いを投影したかのように真っ黒になってバチバチつと不穏な音を立て始め、相手選

手へと飛んでいく。

「きやあああああ！」

「真田選手、アウト！」

そして狙ったさつき必殺技を叫んでた美少女を、服をビリビリに破きながら吹っ飛ばした。

「なっ!？」

「必殺技!？」

相手チームから驚きの声上がる。

「ふあっ!？」

投げた僕も驚く。なんだ今の？

「友親かっこいー!！」

「あの子、まだあんな技隠してたのか」

「漆黒の暴君と名付けよう！相手は死ぬ!！」

「死んでないから！死んでないからね!！」

いや隠してないから！偶然だから今の！

あとなんだその俺の考えた最強の必殺技みたいなの！やめてめっちゃ恥ずかしいから！それと死んでないから！色々見えそうで見えない格好だけど死んでないからねあ

の子!

ってか復活早いな!もう立ってピンピンしてるよ。ただね、こつちを見ながら外野に行くのやめてくれませんか?視線がめっちゃ痛いです。

「もつちー!」

そんな追いつかないツツコミと絶賛錯乱中の僕に時間は非情で、試合は待つてくれない。外野の仲間から容赦なくパスが飛んできた。まだこつちの攻撃ターンは続いているらしい。

いやこつちにはパスしてくるんかい!誰か倒して戻って来てくれないんかい!内野に残ってる今の今の僕だけなんですけど!?!いやまあ相手も最後の一人なんだけどさ。

ってかパスも高い高い!なんつーパス送ってくるんだよ。

「パスミスだ」

相手の外野選手からそんな声が聞こえてきた。

「あーもう!」

ちよつと今この状況を整理させてくださいやがれこのヤロー!

僕は自分を超えて相手の外野まで飛んでいってしまいそうなパスをバックしながらジャンプして空中でキャッチ。

「うそっ!?!」



「あれに届くのか!？」

相手の外野の驚く声に思わずニヤリとしてしまいがら、僕はそのまま相手コートに残る最後の一人に向けてボールを投げつけた。今度はちゃんと特殊な投げ方と、イメージを込めて。

僕の投げた球は青白いスパークをしながら雷のように直角した軌道を取りつつ、高速で相手へと肉迫し、

「きゃあー！」

「武田選手、アウト！」

やはり吹っ飛ばした。衣装をビリビリと破きながら。

この衣装しよっちゅう破れるっていうか破れ過ぎじゃないかな!? しかもなんで毎度、あんな都合のいい破れ方するかな!? いつも肝心な所は絶対見えないように破けるっておかしくない？

「試合終了! 愛和北中学の勝利です!」

そんな僕の疑問は、最後の一人を倒したことによって試合終了と、うちのチームの勝利が宣言されたことによって流される。そして。

「やったああああー！」

「勝った! 勝ったよもっちー!」

「私達優勝だよ！信じられない！」

宣言と同時にチームメイトが次々に僕に向かって走ってきては抱きついてきた。

「ちよ待つ?!?ぐええ、苦しい！ギブ！ギブ！」

次々にくるチームメイトを支えきれずに押し倒されて潰される。

何この柔らかビッグウエーブ!?

むにゅむにゅムニムニが押し寄せてくる！気持ちいいけど苦しい！苦しいけど気持ちいい！てかあんたら服ポロポロで色々見えちやいそうだけどいいの!?!?目のほよ……じゃない、目の毒なんだけど！

「あ、ごめん」

「ちよつとみんなだいて！このままじゃ友ちゃんが潰れちゃう！おせんべいみたいに なっっちゃうよ！」

「あはは、ちよつと興奮しすぎたね」

そう言つて乗つかつてた子達が次々にどいてくれる。かわいい女の子たちに押しつぶされるといふ天国とどごくから開放され、安堵とちよつとの残念感に浸っていたタイミングで、僕はヒョイつと身体を持ち上げられた。

「大丈夫だったか？」

「な、なんとか……先輩？」

僕を抱き上げたのは、うちの学校のドッチボール部の部長にしてチームのキャプテン、灰川先輩だった。

心配してくれたのかと思いきや、先輩の笑顔に何故か背中に冷たい汗が流れる。

あ、これなんかやべえヤツだ。

妙な直感が働いて慌ててもがくも、身長の高い僕が高身の灰川先輩に叶うはずもなくひたすら空中でジタバタするだけだった。

「かつ、かわいいー！」

「もつちー可愛いすぎるー！」

「おりゃー撫でさせろー！」

「何食つたらこんな成長するんだこの胸！ちよつと寄越せー！」

「やあーめえーろおおおおお！」

僕の悪あがきがチームメイトの何か琴線に触れたらしく、みんなに揉みくちやにされる。ええい、揉むな撫でるな抱きつくなあああ！

「まあ落ち着けみんな」

ここですつき妖しいほどのいい笑顔だったキャプテンが止めに入ってくれた。まあ事の初めは全部あなたのせいなんですけどね。だからジト目で無言の抗議をする。

「落ち着いたな。よし、じゃあみんな私達を優勝に導いてくれた立役者を胴上げしよ



がまま状態で身体を委ね再び考える。そして最初に思ったことが自然に口から溢れた。  
「なんぞ、これ？」

## くプロローグく 友親、気付く

僕はいふすきともちか指宿友親。前世は男だが、現世は女に生まれたいわゆるTS転生者だ。

で、転生といえば異世界とチートがつきもの。でも僕にはチートらしいものは何もなく、この世界も前世と何ら変わりなし。ま、それならそれで別にいいかと割り切り、僕は今新しい人生を楽しんでいる。

ところで今回の人生、なんかやたらとドツチボールが流行っている。それも老若男女問わずに大人気。

学校じや休み時間や放課後はそこらじゅうでやってるし、公園やスポーツクラブのグラウンドなんかでもよく見かける。いい大人やお年寄りの方々がやってるのを見た時は流石にちよつと驚いた。おじいちゃんおばあちゃんが結構エゲツないボール投げるの見たときは思わず二度見したわ（笑）

で、このドツチボール、前世と結構ルールが違う。

基本的な所は前世とあんまり変わらないと思う。ただ、コート内での味方同士のボールの譲渡が認められてるし、攻撃側はボールを投げる（？）方法が自由だ。頭を使うが二人で投げようが蹴ろうが、一度ちゃんとキャッチしていれば何をやってもいい。

ついでにジャンプして相手コートに入っても、相手コートに足が着くまでに投げてしまえばルール違反にならない。ただ、自分のコートに戻るまではそれ以外の行動が禁止になるから気をつけないといけない。

あとは場所や相手によって特殊ルールの追加があるくらいかな。

なんだか昔あったバ○ルドツチボールっていうゲームのルールに似ている気がしなくもない。

まあそんな感じだからみんな面白半分でいろんな攻撃を考えて仕掛けてくる。これが結構楽しいうえになかなか奥が深い。そういうわけで僕もこのドツチボールにどハマリした。こういうのってあーでもないこーでもないと色々考えるのも楽しいんだ。必殺技とか考えちゃったりしてさ。

で、肝心のドツチボールの実力の方はというと、実は僕、自分で言うのも何だけどチーレベルでかーなーり強いっ。学校や仲間内でも負けたことはないし、野良ドツチやストリートドツチなんかでも勝ちまくり。

この強さに予測不能の攻撃、あと低い身長と名前にちなんで「おもちゃ箱の親指姫」なんて呼ばれてちよつとした有名人らしい。

……いや、こういう二つ名ってかっこいいし、すごくありがたい嬉しいんだよ。でもさ、わがままを言わせてもらえれば、もうちよつとこう、あつたんじやないだろうか

? 小さな巨人とか、ジャイアントキリングとか。

ま、まあとにかく、俺TUEEEEEEEEEってことだ。

んで、こういう流行りのスポーツって、強いと同性にも好かれるし、異性にもモテる。下からは慕われるし、上からは可愛がられる。

そう、今の僕は人気者でリア充なのだ(ドヤア)

しかも容姿もベビーフェイスだがかなりの美少女で、人気にブーストをかけている。美少女って得だよな。

あ、もちろん自意識過剰じゃない。実際よく告白されるんだよ。男子にも女子にも。

……ただまあ、たまに「お兄ちゃんって呼んで欲しい」とか、「お姉ちゃんって呼んで」とか……いやまあ、結構、かなり言われたりもするけど。

このロリコンどもめ!

……あと容姿といえば、僕は男からしよっちゅうエロい目で見られる。

僕、美少女だしね(ドヤドヤア)

まあそこも大事なことだけど、多分、ていうかほぼ間違いなく原因は僕の胸。おっぱい。

というの僕のおっぱい、仲間内でもよくロリ巨乳とからかわれるくらいにはでかい。小三の辺りから育ち始めたこのけしからんモノは、今や立派な巨乳に成長した。し



かもこれで僕まだ中学生。つてことはだ、こいつまだ成長の可能性があるんだよ。できればこれ以上大きくならないで欲しい。マジで。……重いんだよこれ。

ロリ巨乳なんて漫画やアニメだけのもんだと思つてたけど、実在つていうか自身がそうなるのはさすがに予想できんかったわ。

まあただ、エロい目で見られる事に関しては別に嫌つてわけでもない。元男だから理解もしてやれるし。

ちなみにおっぱいは、わざとユツサユツサさせてやると男たちの反応がくつそ面白い。ガン見するヤツ、真つ赤になつて顔を逸らすヤツ、股間を抑えるヤツ。特に最後のやつはめつちや草生えた。ああいう行動するやつ、実際にいるんだな。もちろん自重しような？とかエロガツパどもめ。とかニヤニヤしながら罵るまでがワンセットだ。

ああ、男たちをからかうのめつちや楽しい。

女子たちに白い目で見られて阿鼻叫喚な男たちを高みの見物で眺めているの楽しい。注目されるのつて気持ちいい。ふふ、僕つてば悪女だね。

そんな感じで僕は第二の人生を謳歌し、中学生最初の夏休みに入る前。

「頼む。一回だけでいい。私達に力を貸して欲しい」

ずつと勧誘を受けて断つていたドツチボール部の部長、灰川先輩に頭を下げられた。もちろんドツチは好きだし楽しいが、だからこそ僕は友達なんかとワイワイ楽しくや

りたい派だ。

「お前ならうちのエースになれる！一緒に全国を目指そう！いや、お前となら優勝も夢ではない！」とかめっちゃ熱く勧誘されたけど、さすがに全国はそんなにあまくないっしょ。いくら僕が仲間内や野良、ストリートドツヂで強いつて言っただって所詮はお遊び、御山の大将つてやつだ。僕くらいのレベルの選手なんてきつと全国にゴロゴロしてるって。

それに他の学校は知らないけど、この学校のドツヂボール部はかなりデカイ。友達やドツヂ仲間でも何人か入部してるくらい部員数も多いし、部室も広くて専用コートなんかもある。学校側もずいぶん気合いの入れようだ。

そんな所にちよい強で調子に乗ってるエンジョイ勢の僕が入るのは色々間違ってると思うし、真剣に取り組んでいる人たちに失礼だと思っただよね。

そんなもろもろの理由で勧誘を断ってたんだけど、先輩の、それもそんな部の部長に頭を下げられ、しかも一度だけなんて言われたら流石に断りにくい。ていうか断れるかこんなん。

「はあ、分かりました。でも本当に一回だけですかからね？それとお役に立てる自信ありませんからね？」

ということでは一回だけ、助っ人を引き受ける事になった。

まあ引き受けたからには無様な真似はできないので、時々練習に混ぜてもらおうようにしました。といつても僕は普通にドツヂボールに混ぜてもらうだけなんです。

ていうかみんな普通に僕を受け入れるからちよつとびつくり。こういうのって、出る杭は打たれるっていうか、体育会系の洗礼とかぶつちやけちよつと覚悟してた。いや、こつちも別に空気悪くしたいわけじゃないからありがたいんだけどさ。むしろなんかめつちや可愛いがられるんですけど。まあ、いいか。

我が人生に一片の問題なし。

つてことで日々楽しく過ごしながら夏休みに突入。ちよいちよい部活に顔出しながら夏休みを楽しんでいる時に、なんとうちのドツヂボール部、県大会を突破して全国大会出場を決めた。

やっぱりあった、全国大会（笑）

まあ予想はしてた。調べてみたら夏と冬にデカイ大会があるらしい。

話を戻して、うちのドツヂ部、破竹の勢いで全国大会も勝ち進み、なんと決勝戦進出。圧倒的じゃないか、我が軍は！

もちろん学校総出で応援しに行くことになり、僕も応援と激励をしようと選手の控え室に行つて、めつちやいい笑顔の灰川先輩に迎えられて……僕はでかい会場のど真ん中のコートに選手として立っていた。

ホワイジャパニーズポー!? 僕、チームの応援にきただけだよね!!

そんなわけがわからない状態で試合が始まってしまい、今度はこっちも向こうも常識外れの球の応酬。しかもみんな異常に身体能力が高いし、当たった子の服は破けるので僕の処理能力を完全に超えて脳がオーバーヒート。で、半ばヤケクソで挑んでみればさらにまさかの決勝弾を決め、現在胴上げされてる真っ最中。

ってああ、そういうえば灰川先輩と一回だけの助っ人の約束してたわ。ここまで考えないといい出せないって僕相当テンパってたんだなあ。……誰がこんな素人に決勝戦に助っ人頼むなんて思うよ!? 完全に想定外だわ! しかも選手登録やユニフォームなんかの準備も完璧でスタメンとか言われれば逃げ出すに決まってるわ!

もちろん用意周到な先輩に回り込まれてしまい、ドナドナされながら試合会場へ引きずられて行つたんだった。

うん、とりあえず決勝戦に無理矢理出場させられたことは思い出したわ。けどあのドツチボールの内容だけはやっぱりわけが分からん。なんで、これ?

しよっちゆうバナー広告出てそうなどつかのソシヤゲや美少女ゲームじゃあるまいし……あ。

あああああああああああああ!!!

謎のドツチボール流行り

ゲームみたいなルール

ゲームやアニメでしか存在しなさそうなロリ巨乳という自分に、美女揃いの強豪チーム

何より

必殺技の存在と弾け破ける女子の衣服

線と線が繋がる。

バラバラだったピースが埋まる。

間違いない。ここは異世界だ。それも男向けの美少女ゲームみたいな世界。そこに僕は転生したんだ。

あ、つてことは僕のこのドツチボールの異常な強さは、もしかして、チート？  
マジか!?……マジかー。